
山頂にて

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山頂にて

【Nコード】

N5122C

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

雪山で映画撮影に挑んだ俳優が遭遇する不思議な出来事

（前書き）

俳優の玉木宏さんをイメージして書いています

BL的な表現を含みますので

気分を害されそうな方はご遠慮下さい

1. 吹雪

「これで・・・生きて帰れたら 記者会見で絶対話そうな
雪山で遭難するってこういうことかって・・・実感したって」

彼は少し無理をしたような それでもいつもの優しい瞳の笑顔で言
った

寒さに身体のあらゆる場所がこわばり 痺れたように自由が効かない
それでも僕を安心させようと 彼は必死の笑顔を作ってくれたのだ
ろうと思う

一回りも歳の違う頼れる先輩 彼は僕を気遣って歩みを止めたばかりに

こうして白い怪物に取り囲まれて身動きを奪われた
僕さえあの時しっかりと歩けていたら

いや彼に無理にでも先に行ってもらえばよかった
今さら悔やんでも仕方がない
それでも僕は悔やまれてならなかった

僕と彼はテレビドラマや映画で顔を知られる俳優だ

大掛かりな雪山での映画撮影に備えて 事前訓練合宿と称して山に
入った

山頂を目指して山小屋を後にした時には 山の空は美しく晴れ渡っ
ていた

太陽の日差しが雪面に反射し 眩しい程の明るさだった

それが あと少しで山頂という辺りに差し掛かった頃から

あっという間に太陽は厚い雲に覆われてその姿を隠した

そして 僕らを吹雪という名の白い怪物が襲った

先頭を歩くガイドは山のエキスパートだった

ガイドの指示に従って 僕らは無理のないスピードでとりあえず山頂を目指す事にした

山頂以外に 吹雪から身を守る小屋はなかった

吹雪は徐々にその風を強め すぐ前を歩くスタッフの姿さえ薄く白く隠し始めた

離れないように はぐれないように 必死で歩いた

それなのに 事もあるうか僕の靴の紐が徐々にほどけ足の運びを妨げ始めた

僕はその場に屈み込むと急いで紐を結び直した

しかし厚い手袋をはめた手は寒さでかじかみ思うように動かないもどかしい程に紐ははらはらと指の間を滑り落ちて上手く結べない

「大丈夫か？」

彼が立ち止まり 声をかけてくれた

「すみません すぐ・・・です 先に 先に行って下さい」

「いや・・・待ってるから 急いで」

「すみません」

そして 僕と彼が立ち上がった時 辺りは真っ白な怪物の腹の中だった

「おーーっ！っ！おーーっ！っ！っ！っ！」

彼の声は周囲の白い壁に吸い込まれるように叫ぶ側から小さく消えてゆく

「おーーっ！っ！おーーっ！っ！っ！っ！」

総勢 僕と彼を含めて7人のグループだった

先行するガイドと最後尾に行くガイドに挟まれて 僕ら俳優は歩いているハズだった

しかし 今 僕と彼の後ろにはガイドの姿もない
そして 前にも残りのスタッフ達の姿もなかった

「・・・視界が悪すぎるな・・・下手に動くと危険なんだろうが・・・」

彼は一時思案するように俯いた しかしすぐにその顔をあげると僕に言った

「このまま雪の中に立ち尽くしていたら凍えるのも時間の問題だ・・・どこか 少しでも雪をしのげる場所を捜そう」

「はい・・・すみません 僕のせいです・・・」

「いや・・・それはいいから せめて二人はぐれないように行こう」
「はい」

そして 僕と彼はお互いの身体をロープで繋ぎ 足を深い雪に取られながら

頭を低くして 顔に痛いほどに吹き付けてくる雪を受けながら
斜面を横方向に歩き始めた

そして何分程歩いただろうか・・・僕らは一軒の山小屋を見つけた
それは忽然と僕らの前方に現れたように見えた
その山小屋の周りだけ 雪が風に吹かれずに静かに舞っていた

「あそこに入ろう」

先輩である彼の言葉に従うべきである事はよく判っていた
しかもこの天候の中である 吹雪をしのげる場所にたどり着けたのはラッキーだろう

それなのに 僕はこの山小屋に入るのがなぜかとてもイヤだった
首筋の後ろがちりちりと総毛立つような不安を感じていた
何か奇妙な 不可解な不安に僕は取り憑かれていた

2・山小屋にて

僕と彼は山小屋の中に入った

そこはとりあえず吹き付けてくる吹雪をしのぐ事ができる場所だった
しかし残念な事に 小屋の中には暖をとれるような物は何もなかった
火を炊くための薪も火種もランプも 当然 電気もなかった

僕と彼は唯一小屋の隅に積まれていた毛布をそれぞれの身体に巻いて
壁にもたれて座り込んだ

歩き疲れた足がじんじんと痺れたように痛んでいた

「そうだっ！携帯電話・・・」

「・・・この天候では無理だろう・・・」

「・・・そう・・・ですね・・・圏外です」

「そうか・・・まあ 山の天候はすぐ変わるから またすぐに晴れる
かもしれない」

「そうですね・・・」

「大丈夫だよ」

彼は僕に笑顔でうなづいて見せた

小屋の中は明かりもなく薄暗く 外の吹雪の音が気味悪い獣の遠吠
えのように響いていた

「無事に山を下りられたら 記者会見で必ずこの話をしような」

そう言つて彼は笑つた 僕はそんな彼の笑顔に救われた気持ちだった

僕はとりあえず吹き付ける風から逃れて緊張の糸が切れた

毛布をかぶつて座り込むと まもなく睡魔の誘いに抗えず

うつらうつらとし始めていた

はじめ 僕は夢を見ているのだらうと思つた

それ は僕の周辺視の中で 彼の上に覆い被さるように彼の顔を
覗き込んでいた

「・・・！？・・・」

僕は それ が彼の - 彼はその目を閉じて眠っているようだ -
唇に何か白いものを

吹き込もうとしているのを見た いや 見たような気がした

ぼんやりとした思考の中で僕は それ がゆっくりと振り向くの
を見た

それは白い陰のようなものだった

（・・・雪女？・・・） まだ夢の中にいるような頼りない感

覚の中で

僕はただ それ から目を離せずにいた

それ はゆっくりと立ち上がると僕の方へと向き直った

人間の形をしているようにも見える しかしその輪郭は白くぼやけ
顔があるべき場所には 白にも銀色にも見える二つの光が禍々しく
瞬いていた

それ の顔は いたずらにモニタージュ写真を作っているように
その目が その鼻が そしてその口が次々と様々な形と色に変わっ
てゆき

一向にひとつの定まったものに落ち着かない

僕は それ を見つめるうちに乗り物に酔った時のような不快感と
目眩を感じた

たまらず僕は目をきつく閉じた

その刹那 それ の声が僕の頭の中に響いてきた

3・死神または妖魔

（お前は 俺が 見えるのか・・・）

「・・・！・・・」

（お前は 俺が 見えるのか・・・）

それは 僕の頭の中に直接響く声だった 僕は目を見開き それを凝視した

しかしそれは変わらず 輪郭をぼやけさせたままめまぐるしくその顔を変化させていた

たまらずもう一度僕は目を閉じた

（そうしているのが賢い・・・俺の姿は相手が決める 目では見えぬ）

「・・・な・・・なんなんだ・・・」

（俺が何なのか知りたいのだろう）

「・・・！！・・・」

（お前には俺が見えるらしいな 久しぶりだ こうして話し相手に出会えるのは）

「・・・せ・・・先輩に・・・何を・・・何をしたっ！」

（くっくくく（笑）お前の思った通りの事をした）

それは低いよく通るとても甘い声でそう言った

僕は雪女の物語を思い出していた 先輩は命を吸い取られてしまったのだろうか・・・

（心配はいらん お前次第でこやつ命も お前の命も奪いはしない）

「ぼ・・・僕次第・・・？」

（俺を見る）

その声に誘われるように 僕はきつく閉じていた目をゆっくりと開いた

そこに それ は居た 僕の目は確かに それ を見ていた

それは薄暗い小屋の中でもはっきりと見えるほど その身体にほんのりと光をまとうていた

しかしその光は妖しくゆらめき 決して太陽のそれではなかった

どこか月の明かりに似た 青白い光だった

それは静かに僕の方へやってきた
歩いているのとも違う 床の上を滑るように近づいてきた

それ の青白い光をまとった それでいて 中心部は深い陰のよう
な漆黒の姿

それは背の高い若い男だった それも とても美しい男だった
黒い長いマントらしきものを羽織っている
すらりとした手足の長い 均整のとれた体格をしている

雪のように白い額に黒く艶やかな柔らかそうな髪がかかっている
細い鼻梁が美しく顔の中心を走り それに続いてふつくらとほの紅
い唇

その美しい唇の両端が軽くつり上がり 冷酷なアルカイクスマイル
を浮かべている
こちらを見つめている瞳は大きく そして黒く潤んだように煌めいて
いる

長い睫に縁取られたその瞳は 優しげでもあり また同時にたまら
なく冷たくも見えた

美しい形の眉を軽くひそめた陰がその端正な顔立ちを少女めいたもの
から遠く引き離している

雪女・・・いや 黄昏の隙間から忍び出てくる妖魔 そのあまりにも
整いすぎた姿は

浮世離れして この世のものと思われず 妖しい気配を濃厚にふり
まいていた

しかし 僕は それ が そのほの紅い美しい唇をにやりとつり上
げて微笑んだ時

背筋に冷たいものが走り 身体が小刻みに震え出すのを禁じ得な
かった

僕は それ の顔をとてもよく知っていた とても身近によく知った顔

聖堂の天使のように美しく 黄泉の国の魔王のように妖しい美貌

それは鏡の中に見知った 僕そのものだった

4・対話

それは僕の正面にいた

そして それはあたかも鏡の中を覗くように 僕の姿そのものにして そこにあつた

僕は自分の目が視力を失い 幻を見つめているのかと何度か瞬きをした

しかし それは変わらずそこにあり その周りに鏡の境界もその縁取りもなかった

それは低くよく通る甘い声で僕に話しかけた

「自分の声で話しかけられるのはどんな気分だ？」

「あまり・・・あまり気持ちのよいものじゃない・・・」

「（笑）そうか・・・そうだろうな」

「なぜ・・・なぜ 僕の姿なんだ？」

「お前じゃない 俺だ」

「・・・？・・・」

「お前は俺で 俺がお前だ」

「な・・・なにを言っているのか・・・判らない」

「くつくつく・・・ホントに？お前は今までホントに自分を知らずにいたのか？」

「自分を？知らずに？・・・」

「まあ いい ようやくこうやってお前からここまで来たんだ どれだけ待ったか」

「待った？　僕を？」

それは僕の両手を掴み立ち上がらせると　静かに顔を近づけ僕の唇にその唇を重ねた

その唇はふつくと柔らかかったがとても冷たかった

その冷たい口づけは僕の頭の芯をも凍らせた

僕は瞳をとじた　膝から力が抜けた

がつくりと倒れ込みそうになる僕を　それは抱き留めて支えた

そしてそのまま僕を強くその胸に抱きしめた

再び重ねられた唇の感触と冷たい吐息を首筋に感じながら

僕は意識を失った

暗闇の中で声だけが響いていた

（お前には特別な力がある・・・気づかずにいたのなら気づかせて

やる・・・）

「・・・特別な？　ちから？？」

（お前に心奪われて　お前に恋い焦がれて　叶わぬ想いに身を焼か

れる思いで過ごす者

お前はそれらの者に気づかずに　本当に気づかずにいたのか・・・

）

「僕に・・・恋いこがれる??」

（そう・・・お前に思いを寄せる者たちに　お前は残酷な微笑みと優しさを与えて

それがより一層の苦しみになる事を知らず・・・そうして　ただ気

づかずにいた・・・）

「気づかずに・・・知らずに・・・」

（己の心と対話してみるがいい　本当に気づいていなかったのか？
本当に知らなかったのか？　お前の本当の心は　残酷に冷酷に自分を慕う者の心を握りつぶす）

「そっ！・・・そんなっ・・・」

（そんなことはないと くつくつく（笑）そうではないというのか？
それでは ここで眠るこの男はどうだ・・・自らの命にかかわる瞬間に

この男はお前のために歩みを止めたぞ（笑） お前はこの男に何を
した？）

「なっ・・・なにを・・・？何もしやしない 僕は何も・・・」

（そう そのお前の純粋な無垢なそして素直で悪意のない優しさと
美しさが（笑）お前の罪だ）

「・・・罪？・・・」

（美しきもの 崇高なるもの 高貴なるもの そしてそれは数奇な
りて儚いもの愚鈍なるもの（笑）

「なぜ・・・なぜ 僕が？」

（答えは いずれ必ずから見えてくる お前は俺を受け入れればよ
い それだけだ）

「お前を・・・受け入れる？それは どういう意味だ？」

（お前も そして お前に魅入られた者たちも 苦しまずにすむ
シアワセになれる

そういう事だ（笑） 俺はお前が俺を見いだす日を待っていたのだ
待ちわびた もう離すまい）

声は消えた 僕の意識の暗闇は果てしなく続く漆黒の闇に取り込ま
れ散り散りに碎けて消えた

5・生還そして変貌

「おいっ！！しっかりしろっ！！大丈夫かつ！！おいっ！！」

僕は頬を叩かれる感触と耳元で聞こえた声に目を開けた

それは吹雪の中はぐれたスタッフとガイドたちだった

「せ・・・先輩はっ？」

僕は飛び起きると辺りを見回してその姿を捜した

「大丈夫 彼も一足先に病院へ運ばれたから ちよつと体温が下がってただけ」

命に別状はないらしい 安心して それよりも君も病院へ行こう
さあ・・・」

そういつて 僕はスタッフに抱えられるようにして担架に乗せられた
救急車というものに生まれて初めて乗った

救出された安堵から 僕は病院へ着くまでにもう一度意識を失った

次に目を覚ましたとき 僕は病院のベッドの上だった

隣のベッドには先輩の姿があった

彼も随分と疲労の後が見えるものの すっかりと元気な笑顔を取り戻していた

僕にいつもの優しい笑顔を向けると 穏やかな声で言った

「今度の記者会見は 雪山で遭難するって事を実感したって
是非とも話さなくちゃならないね（笑） もっと君とゆっくり話も
したかったのに

とんだ目にあつたね お互い まあ 無事で良かったよ本当に 君
が無事でよかった」

（君が・・・無事でよかった・・・）

彼の言葉に僕の胸が高鳴った 今までにない鼓動を自覚して驚いた
なぜ ただそれだけの言葉にこんなにも自分は狼狽えるのか・・・
彼に笑顔で それもかなりぎこちない笑顔で 頷いてみせるのが精
一杯だった

僕と彼は あの吹雪の中 はぐれたスタッフとふもとの山小屋に残
っていたスタッフが
連絡をとりあい 必死の搜索をした果てに 山頂にほど近い斜面に
できた狭い洞のような

場所に身を寄せ合っているのを発見されたそうだが
二人とも意識はなく衰弱していたものの 幸い大きなケガや凍傷も
なく

こうして無事に生還を果たした という事だった

次々と僕らの病室にはお見舞いに知人の俳優や友人たちが詰めかけた
口々に 無事でよかった 何よりだったと僕らの生還を喜び

早く撮影に戻るように体力を回復してくれと 励ましの言葉をか
けてくれる

ゆっくり静養して 早く現場に帰ってこいよと肩を叩いてゆく者も
いた

僕はそれにただ笑顔でありがとうと答えた
それが精一杯だった

僕の耳には 病室に詰めかけた人たちの 声にならない声が聞こえた
それは大概 その人の話す言葉に重なって僕の頭に響くように聞こ
えてきた

「ゆっくり静養してね」そう言ったスタッフの女性は（彼の唇・・・
紅くて綺麗）と呟いていた

「早く現場に戻ってこいよ」そう言った共演の俳優は僕の肩を叩き
ながら

（この清楚な美人顔にこの身体は卑怯だよなあ いい身体してるな
あ・・・）とため息をついていた

何より僕を狼狽えさせたのは 憧れに似た淡い恋心を切なくささや
いてゆく女性達ではなく

僕に対して 僕の肉体とこの顔立ちに明らかに欲情を覚え その胸
の下に組み敷く事を妄想し

自分でもその思いに戸惑い悩む 男性たちの心の声だった

彼らは見舞いの言葉の向こうで（お前を抱きたい お前を抱きたい）

と叫んでいた

僕はその叫びに狼狽え　そして言い知れぬ恐怖を感じた
彼らの内なるその叫びは　僕の脳裏にまざまざと彼らの腕に抱かれ
る己の裸身をも

生々しく写し出し　僕を苦しめた

それが　今まで何の疑いもなく親しく友人として接してきた者であ
ればあるほど

僕は自分の存在を恨めしくさえ思うようになっていった

一刻も早く　一人になりたかった

誰も訪れる事のない　自分の部屋に一人っきりで　ゆっくりと過
せる時間が欲しかった

僕は病院で　ほとんど口を聞かなくなっていた

それは隣のベッドの先輩をとて心配させた

彼の内なる声だけは　その口から聞こえる言葉と寸分違わず
僕を安心させた　彼は心の底から僕を心配し　そして純粋な好意を
もって接してくれていた

見舞客が帰った後のひとときが　僕の唯一の休息の時だった

6．そして内なる　それ　と共に

退院してしばらく　僕は自宅での療養として1週間程の休みをもら
った

一人静かに過ごせる時間はとても平和だった

家族の声は　今までと何ら変わる事なく　僕を大切な家族として
息子として兄として　思い気遣ってくれるものだった

それは　僕を大いに安心させてくれた

家族の暖かい心遣いに包まれて　僕はこの休みでどうにか心の平静

を取り戻した

そして あの雪山へ戻る日が近づいた 今度は映画の撮影がいよいよ始まる

3ヶ月に及ぶかもしれない長丁場になるだろう

僕は山ごもりの準備を始めた

使い慣れた身の回りの品々をザックに詰め 常備薬も持ってゆこうと洗面所の棚を探った 目的の薬の瓶を手にした時

僕は視界の端にある鏡に映っている自分の姿に背中が凍り付いた

それは こちらを見つめてその紅い唇の端をにとつり上げて不気味なアルカイクスマイルで微笑む僕の顔だった

それは 恐怖に怯えて引きつった僕の顔ではなく

冷酷な不思議な微笑みをたたえてこちらを見つめていた

僕は鏡を正面から見据える事ができないまま

洗面所から逃げるように飛び出した

背後で くっくくく という密やかな笑い声が聞こえた気がした

迎えに来てくれたスタッフの車に乗り込み 僕は撮影現場の雪山へ旅立った

僕は同乗しているスタッフ達の声を聞くのが怖くて仕方がなかっただから すぐに普段は飲まないような酔い止めの薬を飲んで

無理矢理に睡魔の訪れを待つ事にした

ほどなく 僕は眠りにつく事に成功した

僕は現場へ到着するまで熟睡した

7・妖魔の囁き再び

撮影が始まった

それは厳しい現場だった 絶好の撮影日和はすなわちほどよく吹雪

なのだ

僕はこの白い雪に取り囲まれる吹雪がとても怖かった
以前は雪も雪山も 身体に辛くてしんどいけれど それでもこんな
恐怖はなかった

今は いつあの白い妖魔がまた僕を連れ去るかと 怖くて怖くて堪
らなかった

「顔色が あまり良くないみたいだけど・・・大丈夫？」

僕にコーヒーのカップを差し出しながら かの先輩が声をかけてく
れた 優しい眼差しが暖かい

「すみません・・・大丈夫です」

「無理しないように ね」 僕の隣の椅子に腰掛けながらそう言った
穏やかな笑顔で僕の顔を見つめる

僕は自分の鼓動が早くなるのを感じ それを気取られやしないかと
思わず彼の視線から目をそらして俯いてしまった

彼の言葉に嘘はない 彼の言葉はまっすぐに そのままの言葉で僕
の心にも響く

他意のない好意を感じる それなのに 僕の中で何かが囁く

（この人と居たいんだ この人の腕の中に抱かれないんだ この人
の・・・）

「・・・ちっ！違うっ！！」

僕は思わず声を上げてしまった

「・・・えっ？何？どうかした？何が・・・違うの？」

「あっ・・・い・・・いえ な・・・何でもありませんっ！すみませんっ」

僕はどうしようもなく狼狽えて 先輩の顔を見る事もできずその場
から逃げ出した

頭を冷やそうとロッジの洗面所で顔を洗った

冷たい水が気持ちよかった 濡れた顔をあげた時 目の前に鏡があ

った

そしてそこに　それ　が居た

それは白い顔に艶やかな紅い唇でじっとこちらを見つめていた
僕はその顔が自分の顔なのか　それ　の顔なのか判らなくなった

僕の中で　それ　が根を張り始めていた　僕の中に張り巡らされて
いく　それ　の細い

血管にも似た根であり枝であり触手であり神経であらう　その存在
を感じる

それ　は僕の中にその居場所を作る　そして　僕を追い出す事なく

ただ　そこにある

ただ　そこにある　だけなのに　それ　は僕を脅かす

今まで気づかなかったもの

聞こえない　見えないフリをして　目をそらしてきたもの
そうしたものたちが　今一斉に僕に押し寄せてくる

人の声だけではない　僕の　自分の心の奥底に密やかに押し込めら
れていた

僕の心の声もが押し寄せてくる

逃げ出した僕は洗面所の床に両耳を手で覆ってしゃがみ込んでいた

「大丈夫か？」

そう言つて僕の両肩を抱くようにして立ち上がらせてくれたのはあ
の人だった

「・・・あ・・・先輩・・・」

「急に飛び出して行つたから心配になつて見に来た・・・具合悪い
のか？」

「いえ・・・いいえ大丈夫です　すみません　ホントにすみません」

「謝る事はないだろう　ちょっと休んだ方がいいんじゃないかな
肩を貸そう」

「はい……」

僕は先輩の肩に支えられて歩き始めた　しかしその足はとても重くて自由に動かない

僕は足をもつれさせてよろけた

先輩の腕が倒れそうになる僕をしつかりと抱き留めてくれた

その厚い胸に抱き締められるように倒れ込んだ僕は息が止まるかと思った

「足　捻つてない？どこも痛めてないかい？大丈夫か？」

僕の顔を心配そうに覗き込むあの人の顔

「あの……このまま……このまま少しだけ……このままで……」

僕は自分の口からこぼれる言葉が信じられなかった

「ああ」

彼はそう言つて　ただそのまま静かに僕を抱き締めていてくれた

恐らく　僕が何かの痛みに耐えているとも思つたのだろう

彼は何も言わず　ただ黙つて僕を支えていてくれた

彼の鼓動が聞こえた　それは規則正しく穏やかだった

8．融合そして再生

彼の肩につかまって　支えられて部屋へ戻った

スタッフが数人心配して薬箱やら飲み物やら何やら持つてやってきてくれた

丁寧にお礼を言つて　付き添つてくれるという申し出を全て断つた
彼らの声が聞こえたから……

（彼の寝顔見たいなあ……）

（一晩添い寝したい……）

（あの唇が……）

僕は耳を覆いたい気持ちを抑えて　必死の笑顔を作つて彼らを部屋

から押し出した

僕は一人 ベッドに横たわった

天井を見上げていたら 涙が溢れてきた

どうしてこんな風になってしまったのだろう・・・

僕が何をしたというのか・・・

僕の何が罰せられなければならなかったのか・・・

（鈍感なんだよ 悪気のない鈍感さ・・・） 誰かの声・・・誰？

ふと見ると 部屋のドアを後ろ手に閉めるあの人の姿があった

「・・・先輩・・・」

「大丈夫か？ 休めそうか？」

あの人はベッドの端に腰を下ろした

「はい・・・」

僕はベッドの上に上半身を起こし 彼の顔を見つめた

いつも穏やかな眼差しで 優しい笑顔で それでいて凜々しく逞しい

めったに実在の人に目標を定めない僕だったが

この人だけは違った 僕がこうありたいと望む大人の男そのものだったから

「・・・何か・・・何か困った事でもあるのなら・・・俺で力になれる事なら

何でも言ってくれないか 一緒にいい作品を作り上げたいと思うだから

君が 君が迷う何かがあるのなら 一緒に解決できたらと そう思うのだけれど・・・」

彼は言葉を選びながら ゆっくりと 僕の顔を正面からしっかりと

見据えてそう言った

誠実な彼の心が伝わった

（君は・・・君は愛すべき鈍感さで 嘘は無いのに人を悩ませる

苦しませる・・・)

「・・・えっ・・・」

僕は思わず声をあげた

彼はただ黙って微笑んでいた　そして静かに頷いた　まるで僕の心が判るように

「・・・鈍感・・・ですか?・・・僕・・・」

小さく呟いた僕に答える代わりに　彼はそっとその唇を僕の唇に重ねた

9．山頂にて

「それが君の魅力でもある・・・かな(笑)天然なんだろう　きっと」
彼は口づけの後　笑いながらそう言った

「・・・鈍感だなんて・・・思ってもみませんでしたよ・・・」

「まあ・・・それがいわゆる鈍感ならではだろ(笑)」

「あっ・・・そ・・・そうですね・・・そうです・・・その通りです」

僕はあまりにも自分が情けなくなつて　続ける言葉が見つからなかつた

「あの日　あの合宿の吹雪の中で　俺は夢を見たんだ」

彼はゆっくりと話し始めた

「最初　君が目の前にいるんだと思った　それ程あいつは君にそっくりだった

でもあいつが俺に向かって笑った時　君じゃないとすぐに気づいたよ
あいつの笑い方は君とは違う　君の明るくて無邪気な笑顔とは全く
正反対の

挑むような試すようなとても挑戦的な笑い方だった・・・」

彼の話はこうだ

あの幻だった山小屋に確かに毛布にくるまって座り込んだと思ったあの場所で

彼は僕にそっくりな それを見たのだそうだ

それ は彼に囁いたそうだ（隣りの眠り姫はお前の想い人か？）と彼は その通りだ と答えたそうだ

すると それは その紅い唇をつり上げて嬉しそうに微笑むと（それなら 眠り姫にも本当の目覚めをプレゼントしなくてはね）と言ったそうだ

そして 彼に冷たい口づけをした 彼はその後の記憶がないそうだ

僕が それ を見て 言葉？を交わしたのは彼が意識を失った後だったのだらう

それ は僕を眠り姫と言った？そして眠り姫の目覚めを僕に？

僕が聞こえるようになった 人々の心の声 それが本当の目覚めだと言ったのか？

それならあまりにも残酷で辛すぎる目覚めじゃないか・・・

僕はこの目覚めの後に 一体何をすればいいんだ どうやって生きてゆけばいいというのだ？

唇をかみ締めてみたものの 溢れる涙をこらえる事はできなかった

そんな僕を彼はそつとその胸に抱き寄せてくれた

彼の胸に顔を埋めて僕はひとしきり声を押し殺して泣いた

涙が次から次へと溢れて止まらなかった

彼はただ静かに僕をその胸に抱き締めていてくれた

彼の胸の鼓動は静かでかわらず穏やかだった

しばらくして 僕のしゃくりあげるような肩の震えも治まった頃

彼は静かに僕の顎を掴み その顔を上げさせた

僕の目の前に少し見上げる高さに彼の端正な顔があった

「大丈夫・・・俺がついてるから」

彼はそう言つて 僕の頬に伝つた涙の後に優しくその唇を這わせた
そして 僕は彼の胸の厚みを感じながらその重みを受けとめる様に
ベッドに身体を沈めた

10・そして

「俺は君が・・・鈍感な眠り姫が目を覚ましてくれてとてもうれし
いよ」

彼は軽く笑いながら言つた
そう言いながら 彼の手は 僕のシャツのボタンをひとつずつゆっ
くりと外してゆく

「あ・・・あの・・・僕は・・・その・・・」

僕の言葉は彼の唇に遮られる
そうしながら いつしか僕はすっかりと身につけていた物を剥ぎ取
られ

彼の視線を痛い程にむき出しの肌に受け

恥ずかしさと それと同時に身体の芯からわき上がるたまらない期
待感で

熱く身体が火照るのを感じていた

彼の唇が僕の身体の上をふざけて遊び回るように這い回る

たまらない刺激に 僕の喉はくぐもつた息を飲む

僕は夢中で彼にしがみつく

彼の首に腕をまわし 彼の唇を求め

彼の熱くたぎつた物が僕の中に押し入ってくる

思わず逃れようと仰け反る僕の腰を強く引き寄せて

彼は強引に僕を深く突き上げた

「・・・はうっ・・・」

僕の口から堪えきれずに声が漏れた

僕の身体の中に張り巡らされた　それ　の触手が　さわさわとざわめき

彼の愛撫に震える　そして　その触手は僕の中で喜びに満たされて大いなる声を上げる

待ち望んでいたものを　身体中で受けとめる喜びを僕は感じていたこれが　僕の本当の目覚めなのか・・・

僕は目眩く快感の渦に身を投げ　心の奥深くに押し込め　閉じこめてきた思いを

解き放った　僕は彼を求め　彼も僕を求めた
幾度となく身体を繋ぎ　僕はいつしか白い目眩にさらわれた

僕は白い怪物の腹の中にいた

そこは視界を果てしなく奪う　白一色の世界だった

僕は一人　その白い世界に立ち尽くしていた

目の前に大きな鏡があった

そこには　僕が映っている

鏡の中の僕は　呑気でぼんやりとして　それでいて高慢で
自分が何も本当の事が見えていない事に気づいてさえない

鏡の中の僕は　周囲から差し伸べられる無数の手を無造作に振り払い

まるで行く手を阻むイバラの蔓を刈り取るように振り払い

自分でもどこへ行きたいのか判らないクセに

ただがむしやに　前へ前へと進もうとしている

足元にある無数の花々を踏みつけて

それに気づきもせず　自分の見えるもの　いや

見たいと思う物にしか感心を示さず

そうやって前へ前へと進み続けている

ああ・・・あれが「鈍感な眠り姫」だった頃の僕なんだ・・・

なぜかはつきりとそう感じた

僕は それ が僕の身体の中で溶けてゆくのを同時に感じた
目覚めた僕は それ を受け入れたのか

それとも それは その役目を果たし終えて姿を消したのか
いずれにせよ 僕は新しく生まれ変わったような
清々しい気持ちで満ち足りていた

目覚めると 僕の頭をその腕にのせ

穏やかな寝息をたてているあの人の顔が間近にあった

それは僕をとても幸せな気持ちにしてくれた

僕はそつと 彼を起こさないように そつとその唇に唇を重ねた

少しだけ・・・まだ少しだけ

もしかして また 人々の心の声が聞こえてしまうのではという不安があった

それでも それはそれでいい とも思った

僕はきつと その声を受けとめて ちゃんとその人にきちんと

僕の気持ちを はつきりと答えていこうと思った

気づかないふりをするのは卑怯だ

たとえ応えられない想いをぶつけられても 向けられても

僕はそれにきちんと 応えられない という答えをしよう

そう心に誓った

もう 自分に向けられる視線や様々な思いに怯えて過ごすのはやめよう

せつかく「目覚めた」のだから

僕は窓から差し込む 雪面に煌めく太陽の日差しを眩しく見つめていた

雪山の夜明けは美しかった

The
end

（後書き）

読んで下さった皆様 ありがとうございます
ご指摘 ご感想など お寄せ頂きますと今後の励みになります
お時間ございましたら是非 コメントをお願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5122c/>

山頂にて

2010年10月10日03時44分発行